# タブーの魚

Dr. Ho Manh Tung

2024 年 10 月 07 日

カワセミは今や老いていた。視力は衰え、聴力も鈍くなり、健康も悪化していた。若い頃、カワセミの釣りの技術は年老いた今よりもはるかに優れていた。科学文献によれば、彼は 4 回のダイビングのうち 1 回しか魚を捕まえることに成功していない。今や年を重ねた彼の釣りの効率は半減してしまった。

***

幸いなことに、体力が衰えるにつれて、カワセミの知恵は増していった。彼は孫子の兵法について学び、体力を節約するためのいくつかの策略を取り入れたいと考えた。うまく適用できれば、1 日に数回のダイビングでその日の魚を十分に得ることができる。孫子の教えにある「以逸待勞」という策略は、彼にとって確かに効果的で適していることが考えられた。

カワセミは次に、鳥の村—バードビレッジで「インテル・バード」というコードネームで知られるスパイの達人を探し求めた。カワセミと話し合った後、インテル・バードは水中の魚の会話信号を盗み聞き、その信号を解読する装置を開発し、それをカワセミの言語に翻訳した。この現代のスパイ技術により、カワセミは静かに枝に止まり、適切なタイミングでちょうど良いサイズの魚を 1 匹捕まえることができた。カワセミはその装置を自分の洞窟に保管し、毎晩次の日の釣り戦略を計画するために使用した。このアプローチにより、最小限の労力でお気に入りの魚を毎日捕まえることができた。

すべては順調に進んでいたが、ある晩、カワセミはその装置から奇妙な情報を拾った。池の魚たちは、カワセミの釣りの効率が上がるのを阻止するために、いくつかのタブーの魚を池に加えることに決めた。この魚は、青いひげを除いて他の魚とほぼ同じであり、毒を持っていた。カワセミがタブーの魚をつかむと、2 日以内に爪を失い、3 日以内にくちばしを失うことになる。この魚を摂取すれば、1 時間以内に致命的な胃の破裂を引

き起こすことになる。タブーの魚がいる限り、カワセミはもう気軽に魚を捕まえることができなくなってしまった。

この情報に驚いたカワセミは、とても怖がった。翌日、彼は他の魚と混ざっているいくつかのタブーの魚を見つけた。釣りを試みるたびに、タブーの魚が彼の爪やくちばしを狙ってきて、何度も失敗させられた。20 回挑戦した結果、彼はたった 2 匹の魚しか捕まえられず、とてもお腹を空かせて寝ることになった。

翌日、状況はさらに悪化し、タブーの魚が 5 倍にも増えてしまった。そのせいで、カワセミはたった 1 匹しか魚を捕まえることができなかった。お腹が空いて疲れたカワセミは、とても眠りにつけなかった。

3 日目の朝、空腹で疲れ切ったカワセミは、池のタブーの魚が 20 倍にも増えているのを見て驚愕した。こんなにタブーの魚がいると、食べるための魚を 1 匹も捕まえられないかもしれない。

カワセミは木の枝に静かに止まり、池で自由に泳ぐ魚たちを悲しそうに見ていた。時々、青いひげを持った魚が通り過ぎるのを見かけて、まるでからかっているかのようだった。とてもお腹が空いていたが、カワセミはタブーの魚を間違って食べてしまうと、爪を失ったり、くちばしが折れたり、腸が破れたりするのが怖かった。だから、彼はじっと耐えて、おいしそうな魚を見つめながら、動くこともできずにいた。

昼の 12 時、カワセミはとてもお腹が空いていた。木の枝の上で足がふらふらして、ついに池に落ちてしまった。飢えで目がぼやけながら水に沈んでいると、タブーの魚が楽しそうにカワセミに向かって突進してきた。この時、カワセミには避ける力が残っていなかった。タブーの魚がぶつかると、生き残りたいという本能が働いて、カワセミはその魚をつかんで木の枝に戻ろうとした。でも、3 日間もお腹を空かせていたせいで、我慢できずにタブーの魚を飲み込んでしまった。意識を取り戻した時、カワセミは自分がタブーの魚を飲み込んでしまったことに気づいた。怖くなって急いで家に帰り、じっとして死が訪れるのを待っていた。

すると、1 時間が過ぎた。カワセミは驚いたことに、死ぬことも爪を失うことも、くちばしが折れることもなかった。体に栄養が入ったおかげで、少し元気になった。正直なところ、カワセミはタブーの魚が結構おいしい、脂っこくて香ばしいことに気づいた。彼はすぐに止まり木に戻り、その日の午後にさらに 10 匹の魚を食べ、その中には 5 匹のタブーの魚も含まれていた。3 日間ほとんど飢え死にしそうだったカワセミは、もうお腹が空いていないので、その夜はぐっすり眠ることができた。

***

数日後、インテル・バードがカワセミに、孫子の考えた「反間計」に引っかかったことを教えてくれた。その後、カワセミはまた孫子による「樹上開花」という情報操作の策略に騙されてしまった。実は、タブーの魚は青いひげをつけた小さなフナに過ぎなかった。賢い魚たちはカワセミをうまく騙し、彼をほとんど飢え死にさせてしまったのである。

*Note: This story reproduces “Taboo Fish” in the fiction title Wild Wise Weird, written by Professor Quan-Hoang Vuong with his permission [1]. Prof. Vuong’s other nonfiction title is Meandering Sobriety [2].

***References***

[1] Vuong, Q. H. (2024). Wild Wise Weird. https://www.amazon.com/dp/B0BG2NNHY6

[2] Vuong, Q. H. (2023). Meandering Sobriety. https://www.amazon.com/dp/B0C2TXNX6L